A prospective randomized trial of potassium competitive acid blocker vs proton pump inhibitors on effect of ulcer healing after endoscopic submucosal dissection of gastric neoplasia

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2019-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小森, 寛之 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002268

授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2046 号

A prospective randomized trial of potassium competitive acid blocker vs proton pump inhibitors on effect of ulcer healing after endoscopic submucosal dissection of gastric neoplasia

(内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)後潰瘍に対する治癒促進効果の検討(カリウムイオン競合型アシッドブロッカーとプロトンポンプインヒビターとの無作為化比較試験))

小森　寛之（こもり　ひろゆき）

博士（医学）

論文内容の要旨
胃 ESD 後潰瘍に対する PPI の効果については現在までに多く報告されているが、近年開発されたカリウムイオン競合型アシッドブロッカー(ボノプラザンフマル酸塩)の効果についての検討はなされていない。本研究では、ボノプラザンフマル酸塩とラベプラゾールとの胃 ESD 後潰瘍の治癒促進効果を比較検討することを目的とした。 本研究は無作為化比較試験として実施した(UMIN000017386)。2015 年 4 月から 2016 年 1 月の期間に、当院にて胃腫瘍(胃腺腫、早期胃癌)に対して ESD を施行した患者 40 名を対象とし、ESD 前に 2 群(V 群：ボノプラザンフマル酸塩 20ｍｇ/日、R 群：ラベプラゾール 10ｍｇ/日)に無作為に割り付け、ESD 前日から治療 28 日目まで内服投与を行った。ESD 直後及び治療 4 週間後に EGD を行い、潰瘍底を測定し、潰瘍縮小率(楕円面積として算出)、潰瘍残存率(崎田・三輪分類：潰瘍ステージの評価)を 2 群間で比較検討した。 最終解析対象は 33 例(男性/女性：24/9、平均年齢 69.5 歳)で、V 群は 18 例、R 群は 15 例であった。患者背景(年齢、性別、BMI、喫煙・飲酒、合併症、*H. pylori* 感染)、内視鏡所見、病理学的所見に関して両群間に有意差はなかった。ESD 4 週目の平均潰瘍縮小率は、V 群：93.3%(平均潰瘍面積 0 日/28 日=741.4/48.0mm^2)、R 群：96.6%(平均潰瘍面積 0 日/28 日=1022.4/31.1mm^2)であり、R 群が有意に縮小していた(p=＜0.01)。潰瘍ステージは全て Healing stage(H1/H2、V 群:9/9、R 群:6/9)であり、両群間に有意差はなかった。有害事象は R 群で肝機能障害が 1 例、R 群で ESD 後出血例が 2 例で、両群での後出血率に有意差はなかった。 胃 ESD 後潰瘍の治癒促進効果に関して、ラベプラゾールがボノプラザンフマル酸塩に比較して優れていた。